

米国ケンタッキー見聞記・パートVII

Rood & Riddle Equine Hospitalの蹄病センターでは、外来診療だけでなく、管内の牧場を巡回して、肢蹄の検査や診断を行い、それらのトラブル予防や治療、牧場スタッフへのアドバイスを行っている。そんな彼らの牧場巡回に随行したので、その模様の一部を紹介する。

Dr. Morrisonらによる装削蹄療法編
(牧場巡回)

写真1は繁殖牝馬の削蹄後の状態である。負面を平に削った後、蹄壁中層下面を全周にわたり上湾状に丸めていた。これは



写真1 4 Point Trimの変法例

最近、我が国でも実践されている4 Point Trimの変法といえる。ただし、平坦で硬い地面では、このような削蹄は蹄壁下面が接地しないため、白線と蹄底外縁のみが負重し、負重面積が少なくなり、蹄底圧迫を招く可能性が残るので、筆者個人としては、この削蹄法には疑問が残った。

写真2は、クラブフットを発症した当歳馬の蹄へのHinge Spring Shoe (HSS)の応用例であり、HSS蹄鉄を装着後4週間経過した状態である。後日、この蹄鉄を外し、蹄形をトレースして、新たなHSS蹄鉄を作製し、改めて装着するとのことであった。筆者も同様のHSS



写真2 Hinge Spring Shoeの応用例

蹄鉄を作製し、クラブフットを発症した1歳馬の狭窄蹄に装着した経験があるが、当歳馬への応用は初めてのことであった。筆者の経験からも狭窄蹄へのHSS蹄鉄は効果的ではあるが、外見的な回復は見られても、内部の敏感な組織への強制的な牽引や圧迫などの弊害も懸念されるので、特に当歳馬への応用にはことさら慎重な判断が求められるべきであろうと思われた。

写真3は、左前肢にOffset Kneeが認められた狭踏兼仮性内向肢勢の馬に接着剤で装着された外側エクステンション蹄鉄である。向かって左側(外側)の鉄幅が明らかに広いことが判る。この広い部分は、蹄の外周からはみ出して、馬が狭く踏むのを防止し、肢勢を矯正する効果を発揮する。この写真は、外側エクステンション蹄鉄を装着して4週間ほど経過した状態である。この方法は、日高でも一部の装蹄師が行っている。

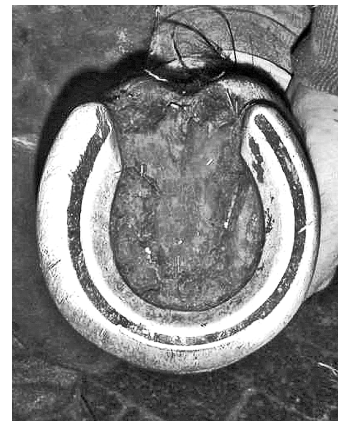


写真3 外側エクステンション蹄鉄の装着

写真4は、外側エクステンション蹄鉄を外し、蹄の内側を低目に削蹄した後の同馬の前肢であるが、依然として膝が捻じれて菱形膝となっている。引き続き後日、同じタイプの新しい蹄鉄を接着するとのことであった。

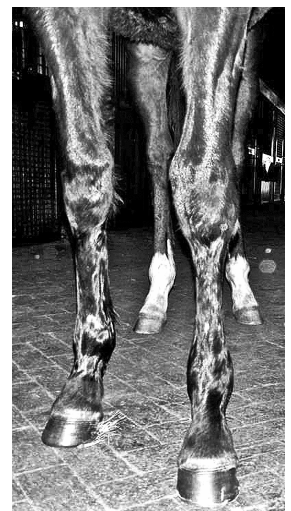


写真4 装削蹄療法中の狭踏兼仮性内向肢勢馬